

江戸時代から雑司が谷に伝わる郷土玩具「すすきみみずく」 保存継承に姉妹都市秩父市も一役

●保存継承の危機に昨年、地域で保存会発足

昨年5月、すすきみみずくの最後の作り手であった岡本富美さん（音羽屋）が、高齢のため店じまいすることになり、このままでは江戸時代から続く郷土玩具が消えてしまうと、地域の町会や商店街の有志が立ち上がり、保存会発足のため動き出した。これに、雑司が谷の文化と歴史を活用したまちづくりプロジェクトを進めていた区も協力し、6回の準備会を経て、同年9月28日、鬼子母神の本坊である威光山法明寺住職（近江正典さん）を会長に「すすきみみずく保存会」が発足した。

保存会では、製作技術を伝承していくための講習会の開催に重点を置き、22年度は7回開催、延べ257人が参加した。23年度からは原則毎月1回、第一日曜日に講習会を開催している。

製作したすすきみみずくは、昨年7月に雑司が谷の情報ステーションとして鬼子母神参道に開設した「雑司が谷案内処」や、鬼子母神の祭礼等で販売している。

●素材となるススキを求めて秩父市に「ふくろう」が取り持つ縁

保存会の発足にあたって課題となったのが材料となるススキの調達。講習会を開催するには大量のススキが必要となるが、区内にはススキが自生しているような原っぱはない。そこで、高野之夫豊島区長が姉妹都市である秩父市の久喜邦康市長に調達場所のあっせんを要請。同市農政課の協力により、昨年は9月に3回、保存会メンバーが秩父市を訪れ、約25,000本のススキを採取した。

秩父市と豊島区は西武池袋線の起終点で結ばれていることから昭和58年に姉妹都市提携を結んでいる。また、平成21年には、さらなる交流・連携を促進するため、池袋のマスコットの存在であるフクロウと、秩父市の観光名所秩父神社の「北辰の鼻」に因んだ「ふくろう協定」を締結している。

「ふくろう」が取り持つ縁で、秩父市のススキですすきみみずくを作るという取り組みも2年目を迎え、今年も9月15、17、18日の3日間、秩父市でのススキ刈りが行われた。（写真添付）

刈り取ったススキは約23,000本。持ち帰ったススキは皮むき、乾燥処理を行い、教材として活用される。

●すすきみみずく●

雑司が谷鬼子母神の参詣土産として江戸時代から伝わる郷土玩具。ススキの穂を20本ほど束ねて作り、ササにぶら下げて飾るもので、「木兔になってぶらぶら枯尾花」など、川柳にも詠われています。また、貧しい孝行娘が母親の病氣快癒の願掛けに毎夜お参りしたところ、鬼子母神が表れ、そのおかげにより作って売り出したのが評判となり、幸せになったとの逸話も語り継がれています。



ススキ刈りの様子



刈ったススキの束づくり



すすきみみずくの製作プロセス